

僕が君達に出来ること
(テスト投稿用比較的適
当二次創作小説)

柳 桃李

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通の日だった夜に突如TOAのライガ！それをなんとか追い返すと近くにジエイドが！その日を境に色んな人たちがやって来た！みんなで住んでギルドも作る？台はついに最終局面！果たして彼らはどんな物語の終わり方を選ぶこととなるのか!?

※テイルズオブシリーズで逆トリップです、ハーメルン様でのテスト投稿と言う形で作ってみたので比較的適当ですがよろしかったら半目で見ながら楽しんでください。

それとヴェスペリアは最近買ったので感じ間違えてるかも知れない、魔導器だけ、漢字あつてるつけ。

※※誤字脱字等ありましたらコメントください！コメント機能があるらしいので。

目次

僕が君達に出来ること（テスト投稿用比較的適当二次創作小説）	1
-------------------------------	---

僕が君達に出来ること（テスト投稿用比較的適当二次創作小説）

思えば前兆はたくさんあった、ジエイドが来た日にはライガが、アレクセイやみんな来たときにはそのフィールドやマップの付近の敵や縁のアイテムがあったり居たではないだろうか？

つまりこの空に浮く大地は！

「…外殻大地？」

「外殻大地が何故？まさか、ヴァン！あなたですの!？」

「ここにはそれが出来る技術も膨大なフォニムもないだろう、ナタリア様」

「そ、そうでしたわ…ごめんなさい…」

アレクセイは考えた、そうなのだ、ここには過去にヴァンがやろうとしたことをここでやることは不可能。

地球上には確かに微弱ながらエアルもマナもフォニムもある、だが全て初級程度しか出来ない、ジエイドですらエナジーブラスト、エステリーゼ様は微妙なファーストエイ

ドしか出来ない。

それとアオイが我々に関与したことにより影響を受けたと思われるフォニムやマナ等を操る譜術や魔術のみ。

ならばあれは雲か？違う。雲とは違う見た目だ、ならばあれは…。

そう考えるアレクセイの視界にチラリとバルバトスが見えた。

「レンズ…か？」

「ふむ、バルバトスがいますからね、レンズがあってもおかしくはありませんね」

「ふんつ、俺はアイテムなんぞ使いはしない！」

「いやそうでした、しかし魔術は使いますよねえ？バルバトス」

「戦いにはレンズが必要なのか？」

「ステイニーは受け流しなら適当にクリアさせたので覚えておりません、何分アビスを念入りにしていたもので。すみません、アレクセイ」

「いや、構わない、私もヴェスペリアですと帝都周辺を回っていたからな」

「（それはずつと序盤しかしてないの？俺様…まさかパーティーINすらしてないのかしら?!）」

レイヴンがアレクセイに自分のパーティーINしてるかしてないかの不安に教われながらそれを感じ取っているシュヴァーンはそれよりも恐ろしいことを言った。

「閣下、あの外郭大地は破壊しますか？」

「ストーツプ！ストーツプストーツプ！お嬢様達も突っ込めつて！」

「おいおいシユヴァーンさんよお、それしたらその下の大地どうすんの？せめて海辺に操るゝとか考えないわけ？」

「ゼロス、お前は出来るのか？」

「でひゃひゃひゃつ、そこは頭脳労働を得意としてくれる人達に任せるんだよ。そのレングズつてやーっ？術式とかで操れないの？」

「術式と魔導器と言ったらリタですね、今はないので術式はジェイドさん、魔導器はアレクセイです？」

「俺は靈力野発達してねえからその事に関しては何もできねえわ、けどジェイドの旦那はその譜眼とかで術式とかやるの得意だろ？動かすことぐらいできんじゃねえか？」

「皆さん私を買い被りすぎですよ、それこそアレクセイがいます」

アレクセイは自分に話を振られるもそこまで得意ではない、確かに心臓魔導具を使ったり作ったり研究したり術式をと色々したが…

「ジェイド、私は君ほど術式を研究したりしていない。機器類でのサポートなら出来ると思うがあまり期待はしないでくれ」

「おや、そうですか。」

「…私の本分は騎士だ、君は研究者が本分ではないか？」

「あなた、アビスもやりましたね？」

「アオイと、な。来た当初していたのをずっと見てたし君も操作した。君ならレンズを壊すのではなく出来るのではないか？」

「操作を、ですか…そこまで言われれば仕方ありませんねえ。やれるだけやってみますよ。では突入の仕方を考えますか」

アレクセイとジェイドのやり取りを見てたアオイはレイヴンに喋りかける。

「なんかあつさり突入出来るそうなの気のせい？」

「おっさんもそう思うわ」

そして後日、前衛にアルヴィン、シュヴァーンで特攻をバルバトス。中衛前寄りの方にヴァン、レイヴン、ゼロス、中衛後ろ寄りの方にナタリア、エステル、アオイで回復とサポート。後衛にレンズを操作する予定のジェイドとアレクセイ、完璧な布陣である。

「軍隊より強そうだなあ…さて、シュヴァーンとレイヴンとジェイドと私で新しい術としてトラクタービームを作り出して…んでみんなを…あー、あそこまで飛ばせばいいんだよね？」

上には空に浮かぶ拡大し続ける外郭大地、それは大分上、飛行機が飛ぶ様などころに

ある。ジェイドらしからぬ考えであった。理由は明白である、空に行く手段と伝がな
い。いや、あるにはあるが先月連絡していこう連絡が来ない。

「いや、絶対に無理！無茶過ぎる！おっさん死んじやう！」

「死にはしないがカデイスブラスティアには確実に過負荷だろう。安心しろレイヴン、
死ぬときは一緒だ」

「いやあああ！おっさんまだ死にたくないーい！」

「安心してください、レイヴン。失敗したら皆死にますので」

「おーし、解散」

「待てアルヴィン！落ち着つくんだ！」

「うっせ！放せよヴァン！どう落ち着けて言うんだよ！」

「どうすんの？これ」

「…やはりもう一度連絡して彼らを待つしか…ん？」

「おや？連絡が出来てないのに来ましたか、丁度良いですねえ…アルビオール
彼等の頭上が突如五月蠅くなる。

そう、アルビオールが来たのだ。実を言うとアオイの所以外にも彼等は落ちていた。
アルビオールを操縦しているのがクラトスなため若干不安であるが。

「すまないな、アルビオールを飛行するための点検に時間が掛かった」

クラトスは降りてくるなり言い訳を言う、彼はジェイドが大層苦手らしい。そのあとに後ろからデイスト、ガイ、カロール、短髪のルーク、イエガーとラーギイと彼らを拾った子。

「す、すみません！遅れて！しかし彼等のお陰で当機、アルビオール改めアルビオールXは新幹線以上の速さに強度もダイヤ並みになりました！」

「なにその謎技術、何があったの」

「それよりもそのネーミングセンスを疑いますね、可愛そうに、サフィールに影響を受けましたか…」

「…もつと御淑やかな子だったような気がするのだが…うむ、そうだ、あんな子ではなかった筈なのだが…」

アレクセイ、ジェイドとアオイが目を細める中クラトスは謝る、どうもその手の者が集まっているため影響を受けてしまったようだ。そんなクラトスも実はバイクぐらいなら全解体からの全組み立てができるようになっていた。

彼らはどこに向かっているのだろうか。

「さて、アルビオールも来ました。」

「ああ、向かうとしよう」

その後彼らは外郭大地のレンズを使い元の世界に帰れることを知り、外郭大地を安全に破壊、操作しつつ帰る準備をした。

全てが終わり一人、また一人と帰っていった。

残ったのはジェイドと同じ世界のアレクセイとレイヴンとシュヴァーン。

「貴女と会ったときはなんて警戒心の無い人かと思いましたよ…けど会えて良かった、ありがとう」

「ジェイド…わ、私だって！会えて良かった！ありがとう！」

「ふっ、では帰りますがちゃんと破壊してくださいね？」

そういうとジェイドは光に包まれて跡形もなく消えた、残るは三人。

「…アオイ、君には破壊できるか？この島並の空中に浮く大地を」

「やれるよ！」

「無理を言うものではないな、君はまだ俺に一太刀も入れられないのだぞ？」

「そうそう、おっさんたちにまだ及ばないのに壊せるの？」

「…それでもやるんだよ、少し、これに力を借りるし」

「ベルセリオス…か」

「中はミクトラン、ミクトランはレンズと、バルバトスは魔物と来てみたいなんだ。だからレンズを破壊すれば多分ミクトランも帰れる」

「君は…好き、なんだな」

「ふふ、そうだね、どんなに周りに屑だ最悪だと言われても…何故か魅力になるのかな」
「だから変なのに捕まるのよ？おっさん心配で帰れないわよ！」

「げ、現実の男は見極めるよ！だから…安心して帰って…みんな」

「…シユヴァーン、レイヴン」

「はい、閣下」「はい？大将」

アレクセイは三人を見ると決意する、そして目を瞑り一言。

「帰るぞ、テルカ・リュミレースへ」

地鳴り、雑音、大きな揺れ。

彼らが帰ったあと私はエアルやマナ、フォニムを無理矢理集めソーディアンベルセリオスと共に技を放った。

島をひとつ沈める、被害の拡大を押しえるために海の上でしていた、魚や海に申し訳ないけどこれが最小限の被害だ。

「やれる、やるんだよ…！集え意思を持つ力！ソーディアン…ミクトラン共に！見よう見真似！島ひとつ消し飛ぶ大いなる力！舞い飛べソーディアン！閃覇嵐星塵！」

島全体に巨大な陣が浮かび上がり全てが塵となり消えた。

その後、魔物も、エアルも、マナも、フォニムも、レンズも、この地球上にはなかったものは何一つ確認されなくなった。

そして、技を放った天草葵の消息も消えた、海に浮かぶ、彼女の木刀を残して。

e n d . . .